

「道」において、最も自然的な道は、獣道だと考える。

そもそもこの「獣道」というものは、大型の哺乳類があらかじめコースを決めて移動する習性から作り上げられる、自然の産物だ。つまりこの「獣道」は、人間が誕生するよりも更に前からあったことが考えられる。そして人間が誕生してから、人間はその高い知性を活かして獣道で猟をしたりしてきた。動物ごとに、クマの通る獣や、イノシシの通る獣道であったりと様々だが、それらは肉眼でも「道」だとわかるくらいに木や枝、植物などが踏み固められているため、登山客が林道や山道と間違えて、遭難することも少なくない。また、間違えて獣道を進むことによって、クマやイノシシなどの大型の哺乳類と遭遇するという危険性もある。猟をする人がごく少数な現在、獣道の我々人間に対するメリットが薄れていき、不必要な存在になりつつある。

しかし、そんな獣道は、自然界にとって大きなメリットを<sup>①</sup>した<sup>②</sup>らしている。それは、植物の発芽だ。植物が獣の体表に種子を付着させて運ばせる方法や、果実を食べさせ、その中の種子を糞と一緒に出して運ばせる方法などがある。いずれも、獣を利用して、種子を遠くまで運ばせることができるという共通点を持っている。これによって、植物は子孫を絶やすことなくいられるのだ。

そんな獣道であるが、我々人間が作る道路のルーツをたどってみると、それが獣道だと言われている。つまり、自然発生的に出来た、ヒトが踏み固めることでできるルートこそが、ヒトの作った「獣道」であり、それに手を加えて歩きやすく、幅を広く作られて路となり、そこから更に改良されて、道路へと致ったのだ。つまり、私達が日頃がら利用している、道路、歩道といった物は、「獣道」の最終段階といっても過言ではないということだ。太古の人間の、生活への知恵が私たちの代まで引き継がれてきているのだ。また、それとは反対に、かつては整備され、交通の往来が活発だった道路。いわゆる街道と呼ばれる道が、別ルートの開拓や、集落の廃村化によって人が全く通らなくなって廃れていき、結果的に獣道と<sup>③</sup>つていく古道や里道も存在する。近年は地方の人口が減少しており、限界集落、廃村も増えてきている。それによって、今後、「獣道」となっていく道路も少なくないだろう。しかし、自然の中で人間が勝手に切り拓いた道を、山の動物たちがもう一度有効活用してくれることは、とても良い事だと思ふし、自然を守ることにも繋がってくるだろう。

自然から生まれた「獣道」を私たちは見守り、保全する義務があると思う。「獣道」は最も古くからある道であり、最も自然的な道だ。

(傍線部分は原文まま)